

山田真弓先生のご薫陶

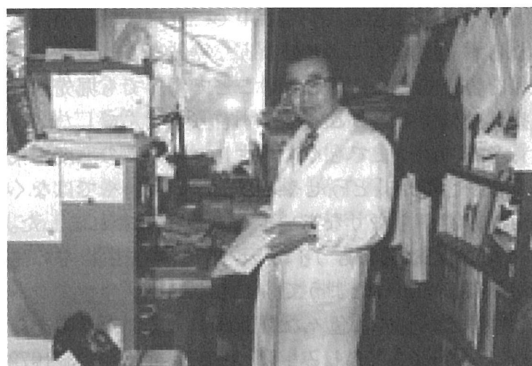
久保田 信【動物学専攻 M23 期】

(京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所)

北大での私の研究生生活は動物系統分類学講座に所属する大学院生として始まりました。その後、助手に採用されるまでの1975~1982年、多感で血気盛んな青春時代に山田真弓先生(図1)のたいへん暖かいご指導を賜りました。その8年間で発見・研究できましたヒドロ虫類(刺胞動物)という不思議で魅力的な動物について、下記の1~5の共著論文を先生と纏めることができました。各々について、発表当時の懐かしい思い出を少し綴って、心からの感謝と共に先生の御霊前に捧げたいと願います。なお、1976~1982年の間に、単著の論文(いずれも欧文)も7篇を公表することができました。このよう

に、思いのほか研究成果を上げることができましたのも、まずは先生が具体的な研究テーマをお与え下さり、フィールド調査等もご指導下さったご薫陶のお蔭です。加えて、故伊藤立則先生や有益な助言を下さる何人もの海洋無脊椎動物研究の先輩・同輩のご助言やご鞭撻等がありました。また、同じ講座に在籍していた多くの昆虫関係の研究仲間との賑やかで楽しい交流も刺激的でした。1983年には山田先生が主査を務められた私の学位論文(Studies on life history and systematics of the Japanese commensal hydroids living in bivalves, with some reference to their evolution)を理学部紀要(Vol.

23: 296-402) に公表することができました。



(図1) 研究室の山田真弓先生
(鳥取大学教授の鶴崎展巨博士1982年12月撮影)

山田真弓先生との共著の思い出

1. Mayumi Yamada, Kazuhiro Konno & Shin Kubota. 1977. On a new athecate hydroid, *Fukaurahydra anthoformis* n. gen. n. sp., from northern Japan. *Proceedings of the Japan Academy*, 53 (3) : 151-154.

弘前大学の故紺野一碩先生が青森県の深浦(学名にも冠された)で発見された本種を、山田先生とお二人で共著論文に纏めあげられていた頃のことです。私は小樽市にある忍路臨海実験所に足しげく通っておりました。室蘭や厚岸の臨海実験所よりも近く、研究の主たるフィールドだったのです。忍路湾から出てすぐ右手に洞窟がぽっかりあいており、その中の暗がりの海面直下に磯巾着かと思いがう様な大型ポリプが多数おりました。世界にまだ知られていなかった新属新種のカウラヒドラで、その記載のお手伝いをする事ができましたのは望外の喜びで、駆け出しの研究者にとってはビギナーズ・ラックでした。

2. 山田真弓・久保田信. 1980; 1981a,b,c; 1982; 1986. 日本近海産ヒドロクラゲとその生活史 (1) - (6). *海洋と生物*, 2 (6) : 402-406; 3 (1) : 9-14; 3 (2) : 123-129; 3 (3) : 224-227; 4 (5) : 328-332; 8 (5) : 342-347.

紆余曲折を経て理学博士を無事取得させて頂き、1981年に研究生となりました。そんな身分故か、先生の「原稿料で少しでも生活のたしに・・・」というお優しい配慮があり、この一連の纏めをお手伝いさせて頂きました。ヒドロ虫類特有の二重分類(ポリプ種とクラゲ種が別の分類体系化)がずっと問題でしたが、ポリプ種とクラゲ種を結びつけた紹介は、当時、貴重な資料でした。先生は主にポリプの分類

がご専攻で、小生がクラゲ種も含めての両者の対応付けの役を担ったことで、日本産ヒドロクラゲ類の生活史情報が一段と蓄積したことになります。

3. Shin Kubota & Mayumi Yamada. 1982. Metamorphosis of a hydromedusa *Bougainvillia bitentaculata* UCHIDA, 1925. *Proceedings of the Japanese Society of Systematic Zoology*, 24: 13-18.

山田先生の師であられ動物系統分類学講座を創設され、かつ日本の動物系統分類学の創始者の故内田亨先生が新種記載されたエダクラゲについて、室内飼育などを通して、クラゲの変態過程と刺胞構成等を解明することができ、この論文で公表しました。院生として入学して間もなく、研究に必須だからとヒドロ虫類の飼育用の恒温器を直ぐに用意もして下さった山田先生のご期待に応えることができました一例です。

4. Mayumi Yamada & Shin Kubota. 1991. Notes on the morphology, ecology and life cycles of *Fukaurahydra anthoformis* and *Hataia parva* (Hydrozoa, Athecata). *Hydrobiologia*, 216/217: 159-164.

1で紹介したフカウラヒドラに加えて山田先生が新属新種として記載されたハタイヒドラもヒドロ虫類のポリプとしては珍しく群体ではなく単体で、しかも形態に限らずユニークな生活史を送ること(シスト形成をして休眠する特異性)が解明できました。その研究を、先生とご一緒にイギリスのサザンプトンで1989年に開催された国際腔腸動物学会の席上で紹介でき、本論文として発表することができました。私も助手として先生のご指導をお手伝いした吉本誠さんの卒論研究成果の一部も引用しております。

5. Shin Kubota & Mayumi Yamada. 1992. A new hydroid species *Campanularia* (*Orthopyxis*) *compressima* (Hydrozoa, Cnidaria) from northern Japan. *Proceedings of the Japanese Society of Systematic Zoology*, 47: 52-56.

厚岸臨海実験所付近の大黒島の寒冷な磯で院生時代に発見していた稀少なヒドロポリプを、ようやく新種として認識し記載できました。先生とご一緒に楽しくあれこれと話しながら、オオヒラタアシナガコップガヤという和名をつけました。どの様な種類を取り扱った場合でも記載分類には文献収集の多大な労力とそれを読破しての英断が必須ですが、山田先生が長年かけてお纏めになられた「シノニム整理リストファイル」が相当数ありました。それらを自由に使用させて頂くことにより、古今東西の文献の渉猟から始まる労を大幅に削減することができ、分類学

の神髄である種の決定への道が最短で開けました。

なお、1983~1992年（北大助手・講師を経て1992年に現職へ転任するまで）の間、1986年に退職された山田先生との欧文の共著が、以下の通り2篇あります。この他には、欧文論文を単著で18篇と共著5篇、先生のご薫陶のもとで纏めることができました。長文の記載（主としてポリプとクラゲの両世代を結ぶ生活史）が大半なので学会誌向きではなく、紀要への投稿が主となりましたが、「北大理学部の欧文紀要は世界に誇れる雑誌である」と胸を張って（講座の他の大勢の方々も）主張しておりました。現行のImpact Factorの評価は基礎研究に携わってきた立場からは感心できません。

6. Mayumi Yamada & Shin Kubota. 1987. Preliminary report on the marine hydroid fauna in Okinawa Islands. *Galaxea*, 6: 35-42.

沖縄の瀬底島に所在する琉球大学臨海実験所付近に、どれだけ多様なヒドロポリプが生息しているか報告致しました。この様な纏まったヒドロポリプの記録は、この海域では初めての成果となりました。北海道とは異なる南国のポリプたちの多様性を先生に十二分にご指導頂けたのは言うまでもありません。科研費の一翼を担った研究で、他の大勢の専門家と交流できたことも格別でした。

7. Shin Kubota & Mayumi Yamada. 1988. The first record of a hydroid endosymbiotic with an ascidian in the Western Pacific. *Proceedings of the Japanese Society of Systematic Zoology*, 38: 1-5

当時、名古屋大学にお勤めだった、ホヤ類の分類の大家である西川輝昭博士から隠岐諸島産のシロボヤモドキに共生する珍しいヒドロポリプを提供して頂きました。山田先生と一緒にホヤノヤドリヒドラという和名をつけて記載でき、この類の西太平洋での初記録となりました。未だにこの記録のみです。

時は流れ2016年10月、久々に札幌を訪れました。もう積雪がありましたが、博物館に様変わりした旧理学校舎内で、青春の汗水を流した研究室を訪ねてみたら、私の研究室だったところは倉庫になっておりました。新しい建物へと移転した旧動物系統分類学講座もお訪ねしました。その講座の後継者としてご活躍されている柘原宏さん達がおられました。また、小生が助手の時に学生だった青沼仁志さんが北大の教員となり別の建物にいらしたのでお訪ねしました。とても有意義なひと時でした。ポプラ並木や黄色く色づいたイチョウ並木もたいへん懐かしかったです。数々の思い出が走馬灯の様によぎりました。

北大を後にして、札幌市内の病院に入院中の山田

先生を、お見舞いに伺い研究討議をする機会がもてましたのが何よりでした。日本付着生物学会編で刊行予定だった「新・付着生物研究法」（2017年発行済）の共著原稿等について、詰めの相談もできました。先生の前案を基に、さらに読みやすく見やすくする方向での改訂でした。再会を約して病院を後にしましたが、残念なことに、先生は2018年、95歳のお誕生日を迎えられた直後の1月13日に他界されました。

小生、2018年3月末で退職を迎えます。これまでの教員生活35年間でどうにかこうにかやってこられたのも、とりわけ大好きな動物学の研究教育に打ち込むことができておりますのも、山田先生のご薫陶の賜物であることを、今一度かみしめております。最後になりますが、山田先生との思い出の中で特に強く印象に残っているのは、ナポリ沖に浮かぶイスキア島に所在する臨海実験所で、1985年10月、国際ヒドロ虫学会の第1回ワークショップが開催された時に、ご一緒できたことです。図2はその会場で撮影された一枚です。大会中、ある外国研究者に、“山田先生の息子さんですか”との声もかけられました。先生は、かつてナポリの実験所で長期滞在研究時に、住まわれていたアパートやナポリ名物のモッツアレラチーズ等を次々と嬉しそうに紹介して下さいました。先生はナポリに数々のかけがえのない思い出がおりだと感じました。これ以外にも、先生との様々な思い出が脳裏を次々とよぎります・・・内田亨先生が愛用しておられた黒サンゴ製の指棒をはじめ、昭和天皇へのご進講（ヒドロ虫類の系統分類学について）の後に賜った銀製ペーパーナイフ等を小生に下されたことなど・・・山田真弓先生の御冥福を心からお祈り致します。



ヒドロ虫学会(Hydrozoan Society)の会場(イタリア・イスキア島に所在するナポリ臨海実験所支所)で山田真弓先生とご一緒に1985年10月撮影(Lecce UniversityのStefano Piraino博士提供)

(2018年1月20日記す)